

山となつてから、私は無職となりましたが、父親と二人分の退職金や失業保険の給付や多少の預貯金で細々ながらも生活に事欠くこともなく過ごしてきました。子供たちも長男は独立して家庭を持ち、次女も近くに嫁いで、代わる代わる孫を連れて里帰りしてくれますので、老妻と二人で毎日楽しく老後を生きております。これも敗戦後六十年以上の平和の賜と思っております。

平和は金で買えない、本当に有り難いものです。あのいまわしい戦争の悲惨な思いは、子や孫には絶対させたくない、させてはならない。私たち戦争体験者も年ごとにこの世を去りますが、肉親や友人、知人等多くの方々を戦争で失った辛さを、声を大にして語り継いで、世界中が平和に暮らせる社会を実現してもらいたいと念願して、日夜神仏に祈っております。

安慶警備、嵐部隊

福井県 吉田弘一

私は大正十一（一九二二）年、福井県鯖江市で、旅館業をしている両親の長男として生れました。家族は姉と弟と両親の五人家族でした。私は義務教育を終了して福井市立福井商業学校へ進学しました。当時は昭和初期で昭和元祿などと言われ、都市部だけが好景気だったようです。

昭和十一（一九三六）年だったと思いますが、二月二十六日、いわゆる二二六事件で、陸軍の若手将校による大臣の殺害や朝日新聞社や警視庁が占領されたりした大事件が起き、外国のラジオ等は日本のクーデター等と報道して東京は大変な騒ぎとなりました。満州事変から国民の知らないところで軍部の台頭が日増しに強くなり、ついに昭和十六年十二月八日には米英に対して宣戦布告をして日米戦争が始まりました。

その年に私は二十歳の成人を迎えて徴兵検査を受けました。当時私は大阪の株式会社辻又商店に就職しており、仕事に馴れたころでしたので朝鮮の京城支店に転勤させられておりました。そのため徴兵検査には帰郷して受けましたが、その結果甲種合格となり、後日、町役場から、昭和十七年十二月十日に京都市の中部第五十嵐部隊に入隊せよとの令書が来しました。当時は、いよいよ国家のためにこの身を捧げるのかと、何とも言えない気持ちでした。

当時はまだ出征軍人の出立には堂々と国旗や幟を何本も立てて送り出しておりましたので、私も鯖江藩主、間部候の代々の殿様をお祭りしている郷社の社前における町主催の壮行会に出席、他の数人の入営者と共に祝って頂きました。その壮行会には町長から激励のお言葉と饒別などを頂きました。しかし翌年からはスパイを警戒してか壮行会が禁止されて、一人でこそこそと入営したそうです。

入営当時の十二月十日、午前には父親と共に汽車で京都へ行き、中部第五十三部隊の営門を通って入隊致しました。この部隊は嵐部隊の原隊であると教えられました。午後になって宇治廠舎に移り、そこで軍服や軍靴などの軍装品一式を支給されました。翌日からは早速、営庭から宇治川の川辺まで、往復駆け足などの体調訓練などがありました。が、郷土部隊のこととしてビンタのような制裁などは何もありませんでした。

原隊は中国へ派遣されておりましたので、二週間ほどしたら原隊から岩城中尉殿が下士官と共に迎えに来られました。いよいよ外地へ向けての出発です。しつかり軍装を整えて京都駅から有蓋貨車に乗って下関港へ行き、貨物船で釜山港へ出航しました。

当時はまだ東シナ海の制海権は大日本帝国にありましたので、途中敵潜水艦の攻撃もなく、無事釜山港へ到着し上陸することが出来ました。釜山からはまた有蓋貨車に乗せられて、安東山海関を

通過して南京に到着したのは昭和十七年十二月三十一日でした。

昭和十八年の元旦から三日を南京で過して、四日に舟（ジャンク）で揚子江を遡航して安慶に向いました。当時嵐部隊の師団司令部及び輜重連隊本部は安慶にありました。我々は何日かして安慶に到着し、各中隊に分散しました。

第一中隊は湖口へ、第二中隊は大通等です。私は第一中隊配属のため湖口へ移動して教育隊が編成されました。教官は田中少尉殿、助教に桑原伍長、他に助手として兵長四人が下命されて、いよいよ初年兵第一期教育が始まりました。初年兵教育は普通三カ月ですが、部隊が常德作戦に出動していたために、我々の教育は六カ月に及びました。この期間中に本部にある弾薬庫が大爆発を起して物凄い火炎を吹き上げた事故がありました。初年兵の我々には一言の説明も何もなく、敵の攻撃もなくゲリラの仕業でもあったのか、私たちに何も分かりませんでした。

私は教官から幹部候補生を志願せよと言われ、試験を受けましたら合格して採用となりました。

採用者は全部で二十七人でありました。早速連隊本部に集合させられて幹部候補教育隊の特別教育を受けることになりました。教官は木村少尉殿、助教は沢田軍曹で約三カ月の教育でした。その中から甲種幹部候補生十三人は軍曹の階級に進級し、さらに教育を受けるために移動しました。乙種幹部候補生は伍長に進級して各分隊に配属されました。

輜重兵科は北京に在るために安慶から舟で南京へ移動し、南京から有蓋貨車で北京へ移動しましたが、その間一度も敵の攻撃もなく、また空爆も受けず、共産八路軍も姿を見せず、無事に北京へ到着しました。我々候補生十三人は常に同一行動を取って八カ月間の教育を無事に終了しましたが、この時の教官は望月中尉殿でした。

卒業式を挙げるために本隊共々に保定に移動して立派な卒業式典をして頂きました。式が終わ

ると直ちに全員が見習士官に任ぜられ、そして原隊復帰のため安慶に向けて出発しました。その途中の南京で私を含めた見習士官四人に総司令部へ出頭せよとの命令がありました。総司令部へ出頭しますと「今から北京へ戻って、北支派遣軍司令部へ出頭して命令を待て」と言うことで、再び北支へ戻って司令部へ出頭しますと、今度は「洛陽へ行って驚師団の命令を受けるように」とのことです。洛陽へ行きました。

そこでは「昭和十九年現役入隊の嵐部隊要員としての初年兵を、驚師団が受領し教育するので、その教官を命ずる」と言われて、その任務に服することになりました。当時嵐部隊は湘桂作戦に出動中でした。

昭和十九年徴集の初年兵は、九月二十日、京都中部第五十三部隊に入隊し、九月二十七日に京都出発、福井県出身（輓馬要員百人、石川県出身自動車要員百人）が輸送指揮官・家名少尉ほか二人の将校に引率され、昭和十九年十月初旬に洛陽に

到着しました。

私たち見習士官四人（片山、小原、吉田、大塚）で全初年兵を受領、輸送指揮官として来られた亀井少尉以下三人は直ちに帰郷させられました。私たち見習士官四人は教官となり助手は驚部隊から応援してもらいました。本隊の嵐部隊は出動中なので私たちは本隊を追及して洛陽を出発、輸送指揮官及び主計官等さらに部隊要員は、驚部隊の応援に南京まで移動し、驚部隊と南京にて合流しました。約三カ月の初年兵教育を終わって連隊長の検閲を受けたあと、我々は南京で、本隊復帰のため待機中の入隊下番者などで初年兵を再編成して安慶に向う事にしました。

しかしその途中において本隊は現在安慶に移動中との情報により留守部隊が在住する武昌に行くことになり、武昌に向いました。この武昌に到着した日から日増しに米軍の空襲が激しくなり、移動出来ず、止むなく約二カ月の予定で夜行軍を強行して安慶を脱出することにしました。

本隊は昭和二十年四月、湖西作戦が始まり、芷江作戦に反転して六月十日宝慶に帰隊、その間激戦に次ぐ激戦で大敗をして、甚大な打撃を受けました。我々は夜行軍を続行して宝慶でやつと本隊に合流することが出来てほっとしました。そこで私は昭和二十年一月十日付で陸軍少尉に任官していたことを知らされました。

八月十五日の終戦は、誰からともなく聞き、二十日ごろに知りました。八月二十五日、復員の指令が出て、十月四日に武装解除となりましたが、その前に機密書類等は焼却処分したり、三八式歩兵銃の菊の御紋などはヤスリで消してから提出しました。

昭和二十一年四月二十五日湖南省の林家橋を出発、五月二十六日漢口出発、六月一日上海港から貨物船で出航、六月八日佐世保港の南風崎に上陸して汽車で鯖江に帰郷したのが六月十日でした。

生家に帰る途中の汽車は窓ガラス等ほとんど無く、乗客は窓から出入りする有様で、まざまざと

敗戦のみじめな姿を見せつけられた感じでした。

生家に帰って見たら父親は中風で寝たきりの重病人で、弟は海軍船舶兵で主計兵でしたが、鳥取県の境港で米軍の空爆によって船もろとも戦死しておりました。母親もそのショックで間もなくこの世を去ってしまったとのことで、姉が何とか生家を支えていてくれました。

こんな悲惨な思いは二度としたくない二度とあってはならない、戦争と言う文字を世界から無くしたいと思っています。

私は昭和二十二年四月に中太織物機屋商會に就職しました。有限会社でしたが、当時は糸へん景気で仕事は順調でした。翌年の四月、妻と世帯を持ち、一人娘も結婚して今は何の不満もなく妻と二人で老後を楽しんでいます。これも戦後六十年を越す平和な社会のお陰と、有り難い気持ちで平和に感謝しております。